慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ローザンヌ学派創設者レオン・ワルラス
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.12 (1927. 12) ,p.1712(100)- 1754(142)
JaLC DOI	10.14991/001.19271201-0100
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19271201-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ローザンヌ學派創設者レオン・ワルラス

永田清

本論はレオン・ワルラスの價値論の解釋並に批評である。小泉教授は、文章の暢達、叙述の拙劣をも顧みず、特に貴重なる時間を割いて御校閲下きつた。未熟なる門下生を惠まるゝの厚き、眞に感謝の外に言なき次第である。猶ほ増井教授、寺尾琢磨氏は本稿執筆中絶へず示教激勵を賜はつた。併せて衷心より謝意を表すものである。

「價値は稍々漠然たる概念である。經濟學に關する著作者は、時々是により明確なる意義を附與しやうと試みて、例へば「使用上の價値」及び「交換上の價値」の如き、樣々なる價値の種類が定義せられ來つた。然し乍ら是等諸定義は、一般に嚴密と的確との缺如に惱み、此語に附せらるべき意義に就ては多くの曖昧が殘つて居る」。（Cassel, The Nature and Necessity of Interest. 小泉教授「價値論の價値」三田學會雜誌第二十卷第三號）

スタンレエ・ジェヴンズは既に夙く、從來慣用の價値なる辭義の多義曖昧にして非科學的なる事を指摘して居る。彼の言ふところに從へば「經濟學者は讀者が思想の混同に陷らざる樣配慮するを常とするが、余の信ずる所を以てすれば、苟も價値なる語を使用する限り、著者も讀者も共に此の混同の危險を避くる事は到底出來ない。余は常に此の點に就き戒心怠らざるものであるが、猶且往々にして自ら此の渦中に陷沒せる事を發見する。余は如何なる著者と雖も決して此の危險を免れ得るものなしと信ずるものである。‥‥

通常、價値なる語は少くとも（一）使用上の價値、（二）尊重若しくは欲求の强さ、（三）交換比率なる三個の異る意義に混用せられて居る。經濟學の發達は、其の根本觀念を表す用語に斯くの如き混亂ある限りは望んでも得られず、是に對する唯一の根本救濟手段は、價値と言ふ危險なる名辭を避け、個々の場合につき次の如き三者の孰れかを以て之に代ふるに在る」と言ふ。

（一）　使用上の價値＝總效用
（二）　尊重＝最終效用
（三）　購買力＝交換比率

スミス、リカアドオ、ミル等英吉利學者の研究對象とするところは、皆（三）交換比率であつて、ジェヴンズも亦價値なる語を正しく使用する限り、其は單に一物が他物と一定比率に於て交換せらるゝ狀態を言ひ表すに過ぎぬものであると考へる。故に全然價値なる用語を廢し、交換比率（Ratio of Exchange）なる誤解の惧なき名辭を以て之に代へ、最終效用に據つて其の原因を説明せんとするのである。

ローザンヌ學派創設者レオン・ワルラスは、其の用語の科學的嚴正を主張する點に於てジェヴンズと其の軌を一にして居る。彼は價値なる名辭に代ふるに交換價値（valeur d'échange）若しくは價格（prix）を以てするのである。（註一）而して彼に從へば、交換價値とは一物が無償にては獲得讓渡せら

るゝ事なく、他物に對し或る比率量を以て賣買授受さるゝの性質である。(Éléments d'Économie politique pure, 4me éd., 1900, p. 44, § 41)斯くの如く交換價値は數量的性質であつて、自由競爭の下に、市場に於て自ら完全に顯るゝ自然的なる現象であり、他物を以て計りたる一物の平衡價格を交換價値の比率と定義し、價格は交換されたる數量の反比であると言ふ。

茲に問題となるは、彼の交換價値原因論と平衡價格論との對立である。私はパレエトと共に此の兩者を以て撞着矛盾するものなりと考へる。(Pareto, Manuel d'Économie politique, p. 247) 原因論に於てワルラスは、恰もジェヴンズが最終效用を以て交換比率の原因を說明したる如く、ラルテ(註二)(Rareté— 充足せられたる最終欲望の强度)を以て價格の原因なりと觀る。此の點に於て數學的精確を遠かり、感情又は意思の强さに關係し、心理的過程の討究に進む。斯くて交換價値は限界效用(Rareté, Das Wert des letzten Atoms, final degree of utility, Grentznutzen)に依つて決すると言ふ明確なる一元的說明に到達する。即ち言ふ—「ラルテが交換價値の原因なる事は確實である」と。(Ibid., p. 102)彼が今日遍く世人に知らるゝは、先蹤ゴッセン、並にジェヴンズ、メンガーと共に價値論上に齎せる此所謂コペルニカス的回轉の爲めであつた。平衡價格論に從へば（殊に其の一般的平衡論に於て）所謂價値と言ふは畢竟「假設的なる一價格」であつて、價値を一個の原因に求めやうとするのではない。ラルテは經濟的平衡の一要因に過ぎざるものであつて、彼は唯社會的に表るゝ經濟的平衡の綜合現象を理解し且之を證明せんとするのである。即ち言ふ—「理論上經濟問題の總ての未知數は經濟的平衡の一切の方程式に依據する」と。(Ibid., p. 289)

然らば、AはBを決定し、BはCを決定すと言ふが如き個別的、連續的因果論(successive causation)と相互因果論(mutual causation)即ち現象の相互依存關係(mutue le dépendance)の說明とは、孰れが論理的正確と擴充發展の可能性とを有して居るか。本稿の論旨は此の問の消息を闡明すると共に、ローザンヌ學派創設者としての彼の面目を明らかならしめんとするに在る。

（註一）Pietri-Tonelli, Traité d'économie rationelle (traduit par H. Gambier) app. 203-4 參照。

（註二）ソルラスが限界效用を示すに rareté(稀少性)なる名辭を以てしたるは、欲望と財貨の存在量との關係を示す稀少性に依つて、限界效用に客觀的意義を附與せんが爲であつた。此の點ゴッセン流の效用論とガーギュスト・ソルラスの稀少性論とを綜合せんとするの努力が窺はれる。

二

故國フランスを逃れてレマン湖畔のローザンヌに其の學問的境涯を發足して以來、絶えず彼の念頭に往來したものは、精確科學としての經濟學の完成であつた。詢に彼は經濟學上に於けるニュートンたり、ダランベールたらんとするものであつて、「經濟學が天文學、力學の列に伍する日にこそ正義は吾人に與へられるであらう」と言つて居る。(Op. cit., préface XX)然るが故に彼は獨自の方法論的考究から出發する。

彼に從へば、スミスは經濟學を科學たるより寧ろ政策なりと思考し、セイは之を自然科學なりと思惟して居る。セイの定義に從へば、經濟學は「富の如何に形成・分配・消費せらるゝやの略說（增井敎授譯に據る）」であるが故に、社會組織をアプリオリとして想定し、政策論の獨立的余地を與へて居

ない。然し乍ら人間は理性と自由とを授けられ、創造し進歩し得るものである。恰も捲くるまゝなるカードの如き、事物の固定的狀態のみを對象として、專心經濟學の理論を研究すべき理由は毫も存せぬ。社會組織の改革も亦經濟學の一部門たるものである。(Op. cit., pp. 3-15) 即ち兩者に對するワルラスの批評は、スミスもセイも未だ純理經濟學(Économique pure ou rationnelle) と應用經濟學(Économie politique appliquée)とを區別して論究せずと言ふのである。

由來ワルラスの科學と政策との區別は、シャルル・コクランの「政策は助言し命令し指導す、科學は觀察し說明し立證す」(Dictionnaire d'Économie politique, par Coquelin et Guillaumin, 1873, § Economie politique, pp. 643-71) との言に負ふ所甚大であるが、彼は又獨自の觀點より科學・政策・倫理間の區別を提言して居る。彼に從へば、科學は總體的事實の研究に非ずして、個々の事象を研究するものである。あらゆる科學的研究の對象は個々の事象、其の事象間の關係並に法則であつて、此の對象の相異に據つて科學の分類が生ずる。自然力の結果を研究對象とするものは、純粹なる自然科學であり、人間意思の結果を研究對象とするものは精神科學(science morale)である。然らば經濟學は孰れの科學に屬すべきものであるか。彼に從へば、經濟學は其の相對的標準に從つて三部門に分たるべきものである。眞理を標準とする純理經濟學は、社會的富を對象とする社會的自然力の研究であり、有益を標準とする應用經濟學は、富に及す人間行爲より生ずる諸力の研究であり、正義を標準とする社會經濟學は、富を主題とする場合に於て生ずる人間間の關係の研究である。即ち社會經濟學は l'homme ethicus を中心とする社會的富の分配理論であり、應用經濟學は l'homme coenomicus を中心とする社會的富の生產理論であり、純理經濟學は、l'homme economicus を中心として、本質上絕對的自由競爭行はるとの假定的制度のもとに於ける價格決定理論である。

斯くの如く、出發點より明確なる假設のもとに全幅の妥當性を有する經濟法則を確立せんとするは、恰もマーシャルが「他の事情にして等しき限り」(other things being equal) と言ふ辭句を用ひて巧みに一次的關係を遊離し、其れ以外の一切諸力の作用を停止せしめたと等しき結果に到達するのである。然らばワルラスは以上の如き假定的制度のもとに於て、社會的富の種々なる要素間に確立せらる自然的關係を、如何なる方法に依つて確認立證せんとするのであるか。

三

ワルラスの定義に從へば、「純理經濟學は本質上絕對的自由競爭行はるとの假定的制度のもとに於ける價格決定理論である。有用にして稀少なるの故を以て價格を有し得る物質的非物質的なるあらゆるものの總體は、社會的富を構成する。故に純理經濟學は又社會的富の理論である」と。(Op. cit., préface, xi) 而して自由競爭が最善なるものなりや否やに就ては、應用經濟學の範圍に屬するものであると考へる。斯くて彼は天才的洞察力を以て、斯くの如き假定的制度のもとに於て表るゝ經濟現象が、其の結果に於て全く數理的である事を發見立證した。即ち言ふ—「人間の自由意思を數學的に計量しようとはしなかつたが、其の結果を數學的に說明した」と。(Op. cit., p. 232) 彼に從へば、交換價値は自然的のものなるのみならず、評價し得る一つの大さ(une grandeur) である。而して數學は一般に此の種の大さを研究對象とするが故に、交換價値の理論は數學の一分科である。故に純

理經濟學は物理數學(science physico-mathématique)に類似するものであつて、其の類型を經驗に求めるから、全體的の理論構成は形而下的となり甚しく經驗的且現實的となるのである。斯くの如く彼は經驗的立場より、現象の一般的關係を全體的に考察し、其の結果、經濟現象の種々なる要素間に成立する相關關係の一般的條件、即ち一般的平衡理論に到達する。ワルラスがローザンヌ學派創設者としての榮譽を擔ふのは、此一般的平衡論に由るのであつて、バレエト、(mannel d' Economie politique 以後)パンタレオーニ、ラウンハルト、バロオネ、ボバン、モレエ、ザワヅキー等後期ローザンヌ學派に屬する論者の主として發展擴充せる點は此函數論的說明である。而して此ローザンヌ學派の方法論と墺太利學派のそれとの相異は、メンガーの限界效用論とワルラスのラルテ論との相異並に其の本質を明示する所以であるから、私は兩者の簡單なる比較を試みようと思ふのである。

由來墺太利學派は明瞭なる方法論を有し、該學派の經濟學上に於て有する意義は、價値論と共に其の根柢を貫く抽象論的基本觀念に由るものでつた。メンガーの所言に從へば、「科學は總て其れ自身の研究を撓まず分析せる人に依つて創造され、改革された」と。詢に彼等の成功は假令無意識に用ひたにせよ、或は獨自の特質を與へなかつたにせよ、正當なる方法の採用に歸せらるべきである。(I. N. Keynes, Scope and Method of political economy, p. 5)彼は一方純理經濟學と經濟史並に統計學とを區別するの必要を論じ、他方純理經濟學と實際經濟學とを混同すべからずと主張して居る。而して論爭頗る努めたる歷史學派との對戰を以て明らかなる如く、墺太利學派の方法論は大體正統學派の其れを踏襲し、經濟現象の規則性の統一的說明を達成する爲に、經驗心理學に其の論據を求めて居る。從つて經濟學が精確科學に關する限り、經濟法則は各個人の經濟活動に現るゝ統一的傾向であり、全く個別的諸因子の集合的所產である。從つて價値法則の內在性の問題も Atomismus に據つて之を解釋したのである。斯くの如く、一方、精確科學としての經濟學を確立する爲に抽象論を採用しながら、他方其の根柢を個人心理に求めた點に於て、墺太利學派は正統學派を心理的に擴充し、以て其の幼時に避け難き疾患(ordinary disease of the childhood - Böhm-Bawerk)を治療するものと解する事が出來る。此の點に於てベーム・バヴェルクは得々たる口吻を以て次の如く語る。「古典學派は天才的燗眼を以て經濟法則を確立說明したが、遂に之を基礎とした統一的說明に到達しなかつたのは、交換價値に注意を集中し、使用價値に就て檢覈を怠つたが故である。即ち此の點に古典學派の大なる缺陷が存する。現代の限界效用說は、吾人の幸福と財貨との關係に無數の差異が存し、此の差異が、他人との交換關係に於て頗る重要となり來るの事實を提示する。斯くの如き論究に依つて經濟理論のルネッサンスは齎らされたのである」と。(詳細は、„Die österreichische Schule"—Gesammelte Schriften von Böhm-Bawerk, SS. 209-229 若しくは"The Austrian Economists" by Böhm-Bawerk-Annals of the American Academy of political and social science, vol. I, pp. 361-384 參照)

斯くの如く、墺太利學派は創設者メンガーが不朽の著„Grundsätze der Volkswirtschaftslehre"の冒頭に於て明言せる通り、「總ての事物は原因結果の法則のもとに立つ」が故に、經濟學を精確科學として論ずる範圍に於ては、抽象論的因果論を以て經濟法則を確立したのである。

ワルラスを初めローザンヌ學派は、精密なる數學的方法により經濟理論を說明して居る。ワルラ

ス自ら墺太利學派を評して、「メンガーは演繹的方法を使用したが數學的方法に從ふ事を避けた。故に余はゴッセン、ジェヴンズに對する批評を其の儘メンガーに適用しようとは思はぬ。メンガー及び其の後繼者等が本來數學的なる問題を論ずるに數學的方法と用語とを以てしないのは、貴重にして然も必須なる源泉を放棄するものなりと言はんとするものである」と。(Op. cit., pp. 171-2)かるが故に墺太利學派とローザンヌ學派とを區別すべき標準は、此の數學的方法に在ると言ふを常とする。

然し乍ら私の信ずる所を以てすれば、單に理論の說明に數學を利用すると否とは、理論經濟學の根本問題としては、畢竟枝葉の問題たるに過ぎないのであつて、數學的方法が單に便宜上の問題たる以上、基本的なる方法論上の問題としては、上述の區別は所詮皮相の見解たるを免れぬ。

經濟學上に於て一般的に言ふ數學的方法とは、他の方法と對立するものではなくて、他の方法と並び用ひられる方法の總稱である。ジェヴンズは經濟學を以て本質上數理的なりと觀て居るが、數理的と言ふ言葉を廣義に解し、量的關係を論ずる總ての研究を包括する限り、此は確かに妥當なる論述である。詢に一般數理學派が經濟生活の自然的關聯と論理的統一とを解明するに數學的記號を使用するは、他の方法に據るよりも、自己の思想をより迅速・簡明・精確に表現し得るの利益があるからである。

然るにローザンヌ學派は決して斯くの如き便宜上の問題より數學的記號を用るものではない。數學と雖も前提・對象の誤謬なる場合に於ては、通常の論理に於て然るが如く、等しく誤れる結論に到達するに變りはない。かるが故に數學的方法の必須缺く可からざる理由は、若し其れありとすれば他方面に求めらるべきであらう。詢にローザンヌ學派が數學的函數論的方法に據るは、必要已む可らざる必然的歸結である。蓋し彼等は經濟問題を論究するに特殊の方法論的立場に立脚するが故である。即ち諸種の條件を遊離して經濟現象を斷片的原子論的に考察するの方法を退け、總ての經濟現象を論究するに一般的平衡(mutuelle dépendance générale)の觀念を以てし、一般的現實的妥當性を有する法則を探究せんとするが故である。

フィッシャーの如きは、頗る複雜なる數學的記號並に研究用具を以て經濟法則を說明しながら、其の出發點たる、先づ最も單純なる個々の現象を說明し、次に以前遊離せられたる諸條件を漸次導入する事によつて一般的法則を求めんとするの方法を採用して居るから、最もローザンヌ學派に接近して居る一人たるにも不拘、依然として兩者間には越ゆ可らざる溝渠が認めらるゝのである。

嶄新なる學說を唱へて、獨りフランスに孤城を守る後期ローザンヌ學派のジャック・モレエは次の如く論じて居る。—「從來經濟學研究に數學的方法を使用するものを總稱して數理學派と呼んで居るが、其の主題とする研究對象の相違する場合、數學を使用すると言ふ事實のみを以てしては、何等本質上の學派的區別を生ずる理由とはならない。必要不可缺の場合以外には、數學の使用は高尙がり(snobisme)に過ぎない。余の見解を以てすれば、經濟學に數學の使用を必要ならしめるものは、經濟的平衡の分析であつて、經濟的秩序の諸要素間に樹立せらるゝが如き相互依存の關係こそ、數理經濟學固有の領域であらねばならぬ」と。(L'emploi des mathématiques en Économie politique, pp. 26-7)私はモレエの此の剴切なる所論に服する。キーンズの言ふが如く、墺太利學派も本來數學的色

彩をもつものであつて、唯數學的用語を用ひないだけの違ひがあるに過ぎぬ。(J. N. Keynes, Op. cit., p. 266)然りと雖も、ローザンヌ學派以外に數理學派なる名稱を認容せずと言ふモレエの所論に至つては、聊か偏狹に失するの嫌なきを得ないのである。何故ならば、モレエに從ふ限り、ローザンヌ學派を除くゴッセン、ジェヴンズ、フィッシャー、エッヂワース等の如く制限されたる意味に於ける相互依存の學理を唱へたる學者は、皆數理學派以外に放逐しなければならない事となり、其れが爲にローザンヌ學派なる特殊の名稱の存在する理由をも失ふ事となるからである。從つて私は、社會的に顯るゝ經濟現象の數理的性質を看取して以て相互依存の數理的說明を試みるものを總括的に數理論者と認め、ボバンに從つて之を次の如く分類せんとするものである。

一、制限されたる相互依存の學說

（A、數學的記號のみを使用するもの
（B、數學的記號並に數學的論理を使用するもの

二、一般的相互依存の學說（ローザンヌ學派）

數學的記號並に數學的論理を使用するもの

此の故にローザンヌ學派と墺太利學派との間に認むべき究極の區別は、ワルラスを初めローザンヌ學派をして數學を用ひざるを得ざらしめたる研究對象其のものに存すと言ふべきであらう。詢にローザンヌ學派をして數學的方法を用ひざるを得ざらしめたるものは、函數關係に基く一般的平衡理論であつて、個別的因果說を以て經濟理論の研究を一貫せる墺太利學派と截然區別すべき基準は實に茲に求むべきである。

然も猶ほ、創設者ワルラスの一面には、ゴッセン流の心理主義が均しく强調せられて居る。此の點に於て彼はジェヴンズ、メンガーに接近しようとする。斯くの如き思想の混亂は遂に救ふべき道なきか。彼は根本觀念の論理的統一に到達するに何等の緒をも與へなかつたか。斯くて私は茲に彼の所論の精細なる分析を試みるの機會に到達し得たと思ふ。

四

ワルラスは千八百七十四年五月二十三日附ジェヴンズ宛の書翰に於て、「余は茲に引用するの義務と喜悅とを感ずる二人の先覺に負ふところ甚だ大である。父オーギュスト・ワルラス並にオーギュスタン・クールノーは此の二者である。……余は經濟學者としての經歷の第一歩を踏み出して以來、父の交換理論にクールノーの函數計算を適用しようと努めて來た。」(Théorie mathématique de la richesse sociale,—Correspondance entre M. Jevons et M. Walras, p. 30)と述べ、又 Éléments d'Économie politique pure の序文(p. VIII)に於てゴッセンの效用曲線の重要を認め、千八百八十五年「未知の經濟學者へルマン・ハインリッヒ・ゴッセン」なる論文 (Journal des Économistes, avril et mai, 1885,-Études d'Économie sociale, pp. 351-74)を以て彼の生涯と論述とを願望して居る。

然もワルラスは、自ら經濟理論の根本原理（ラルテ論）は之を父オーギュスト・ワルラスの價値論に負ふものなりと言明した (Op. cit., préface VIII)。故に第一に檢覈すべきは父ワルラスの價値論であらねばならぬ。(註一) 若しもワルラスが其の著 Théorie mathématique de la richesse sociale, 1883.

に於て述ぶる如く、彼のラルテがオーギュスト・ワルラスの言ふラルテと全く同一内容のものであるならば、ジェヴンズ、メンガーに先んずる事四十年、ゴッセンに先んずる事二十三年、父ワルラスは既に限界效用説を創唱せりと言ふべきであらう。兩者は果して同一内容のものであるか。

オーギュスト・ワルラスが獨自の價値論を開陳して居る「De la nature de la richesse et de l'origine de la valeur, 1831」(註二)は、當時一世を風靡せるジャン・バティスト・セイの經濟理論の名聲に蔽はれて久しく顧みらるゝことなくして過ぎた。(註三) 固より兩者間には明確なる懸隔が認められる。セイの價値論は效用を根柢として構成せられて居る。然るに父ワルラスに於ては、效用を經濟價値の根柢には置いて居ない。(Albert Schatz, Individualisme sociale et Économique, p. 125 參照)オーギュスト・ワルラスの常に言ふ價値が交換價値であることは、次の言を以て明らかである。「一物が價値を有するの事實明白となるは、其れが交換され得る能力に由るのである」と。(Ibid., p. 18)然りと雖も、彼は效用を全く否定し去るものではない。本來效用が財貨の根柢なるは自明の理であつて、唯、經濟學に於ては之を論ずるの必要なしと考へるのである。即ち言ふ―「效用なる觀念は、經濟學上に於ける富なる觀念よりも廣義のものである。效用あるものゝ所有は、Moraliste にとつては眞の富 (une véritable richesse, ou une richesse réele) を構成する。然し乍ら、經濟價値の所有は、評價し得る富 (une richesse appréciable, ou une richesse mathématique) を構成するのであつて、此の富こそ經濟學の對象となり得るものである」と。(Ibid., p. 50 et p. 124)從つて經濟價値は效用より生ずるものではなくて、其の原因は稀少性(效用あるものの rareté)に在る。(Ibid., pp. 43-4) セイの「有用ならざるものに對しては何物をも與へぬ」と言ふは眞實である。が又「既に充分有し、或は何時にても有し得るものを獲得する爲に、吾人は何物をも與へぬものである。(Ibid., p. 34)「今日(一八三一)迄不幸にして常に經濟學者の考察より漏れて居たが、然かも極めて重要なる事實がある。財貨量の制限即ち稀少性は是である」(Ibid., p. 18)。「量の制限は單純なる效用と對立する交換價値を生じ、繼續期間の制限は資本と對立する所得を生ずる。經濟學は全く此の制限の二重の事實より生じ、此の二重の形式に關係する」(Théorie de la richesse sociale, p. 15)と言ふのである。斯くの如く、彼は經濟價値の原因は專ら稀少性なりと斷定したる後、更に進んで、然らば效用は價値に全然影響を及ぼさざるやの問題に答へて次の如く言つて居る。「效用は稀少性に影響することに由つて間接に價値に影響する場合がある。效用が增加するに從つて稀少となる場合、價値は騰貴する。價値は一見效用に比例すると思はれるが、實際は唯だ稀少性に比例するだけである」と。(De la nature.—p. 149)而して彼は效用を區別して、效用の强さ(l'intensité de l'utilité)と效用の廣さ(l'extension de l'utilité)との二とする。(Ibid., p. 150) 前者は個人的に見て欲望の緊要の程度を示し、後者は社會的に見て欲望を感ずる人間の數を示す。稀少性に影響を及す事に依つて間接に價値に影響を及すものは效用の廣さであるが、此の現象は效用の强さと密接に關聯して居るものであり、其の自然的結果である(Ibid., p. 152)と考へる。

社會的に起る欲望の量を個人的效用の强さの集合と觀る點に於て、後の限界效用説と極めて密接なる關聯をもつては居るが、ラルテを定義して「量に制限ある財貨の總和と享樂を要求する欲望の

總和との比である」(Ibid., p. 41)とし、交換價値を論ずる場合に專ら社會的に顯るゝ效用の廣さのみを考察し、之を以てラルテなる比例の構成要件の一つと觀て居る以上、(Ibid., p. 152)彼の說を以て限界效用說の先蹤と做すは不當であつて、兩者は旣に出發點を異にして居ると觀るべきであらう。されば之レオン・ワルラスが、ゴッセン流の效用理論より出發して遂に限界效用說を徹底させ乍ら、猶ほ效用を社會的見地より觀んとする傾向の甚だ濃厚なる所以は、斯る所論を抱懷せる父ワルラスの影響と見るを以て至當なりと信ずる。

（註一）ジェヴンズも亦「ワルラスが、迚つて以て自己の學說に到達せる思想の聯絡を遡るならば、吾人は父オーギュスト・ワルラスの「De la nature de la richesse et de l'origine de la valeur」なる著作に論及するを以て當然とする」と述べて居る。(The Theory of political economy, preface xxxix, 4th. ed.)

（註二）筆者は、容易に入手し難き本書の、メンガー文庫中に在るを知り、日頃師事する增井教授の御紹介によつて、之を商大圖書館事務室に於て借覽し、其節高垣博士から懇切なる御提撕を賜はつた。特記して兩先生に深甚の謝意を表する次第である。

（註三）オーギュスト・ワルラスの論ぜらるゝ事は頗る稀である。然も價値學說史上、彼の所說の看却すべからざる事は、高橋教授の指摘せらるゝ通りである。(三田學會雜誌第十九卷第二號「古典的價値學說と效用概念」二一頁)

五

次に論ずべきは、ワルラスとクールノー、ゴッセン、ジェヴンズとの關係である。

クールノーのワルラスに及ぼせる影響はワルラス自ら言明する通り、函數計算の技術である。(Eléments, préface VIII) クールノーの經濟理論の對象は富であり、精細なる交換理論の研究を以て終始する。彼の所論の中核は需要の法則であるが、之を以て交換理論の根柢とする立場は、決して塡太利學派の說明するが如き需要の側よりする價格論と混同されてはならない。彼の需要の法則は價格と需要量若しくは販賣高との函數關係を示すものであつて、個人的欲望の如き主觀的要素を價格論外に置くを以て特色とする。即ち彼は「需要は價格の函數なり」との命題のもとに、相互依存の關係を函數論を以て詳細に說明する。(Principes de la théorie des richesses, 1863, Liv. I. chap. VI, De la loi de la demande, § 55) 詢にマーシャルの言ふが如く、クールノーの敎ふる所に據れば、一經濟問題の種々なる因子は—AはBを決定し、BはCを決定すると言ふが如く、一因果の連鎖の中に於て順次に一は他を決定すると觀るべきものではなく—總ての因子は互に他を決定すると看るべきものである(Principles of Economics, 1st. ed., Preface ix-x)。ワルラスが技術としての函數論をクールノーに學んだと言ふ一事は異論の餘地がない。(Eléments, préface VIII et Lettre à Jevons)然も兩者は次の點に於て根本的差異を示して居る。クールノーの出發點は獨占の場合であつた。反之、ワルラスは自由競爭の完全に行はるゝ社會に於ける經濟現象全體を其の對象として居る。此の點に於てワルラス自ら次の如く論ずる。「余は數年來經濟學を自然科學として論述するに努めて來た。而して今日クールノーの理論とは異れる經濟理論の上に自己の學說を樹立して居る。彼は獨占より出發して自由競爭に到達して居るが、余は自由競爭の一般的な場合より出發して、獨占なる特殊形態に進んで行くを以て正當なりと信ずるものである。彼は全體的に微積分を使用して居るが、余は少くとも理論の根柢を樹立する爲には、解析幾何の範式に依賴する事に於て成功して居る。我々兩者の研究は決して同

一のものではない。余は彼の方法以外には、彼より借りて居ない。固より此の技術のみにても負ふ所甚大であつて、余は常に此の偉大なる勞作を成就したるクールノーの名を賞讃して措かざるものである」と(Théorie mathématique de la richesse sociale, p. 10)。

然るにゴッセンとの關係は之と相異する。即ちゴッセンはワルラスの理論構成に直接影響を及せるものではなくて、ワルラス自らゴッセンとは獨立に效用曲線と最大滿足の原理とを確立したのである。ワルラスは「ゴッセンの效用曲線が既に夙く唱へられたるの事實は認容するが、余の概念は何等之に負ふ所あるものでない」と斷じ(Éléments, préface VIII)、又最大滿足の原理を述べたる後、「此と同一歸結に到達するものは余一人のみではない。既に早く獨逸にヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセンがある。彼は千八百五十四年 „Entwicklung der gesetze des Menschlichen Verkehrs und daraus fliessenden Regeln für Menschliches Handeln" なる書を出版し……最大滿足の條件に達する爲には、「二財貨は交換後、各財貨の最後に得られたる單位が、交換者相互に等價値なるが如くに分配されねばならぬ」(S. 85)と言つて居る。是は余の方程式

$$\varphi_{a,1}(q_a-d_a)=\varphi_{a,2}(d_a),$$

$$\varphi_{b,1}(d_b)=\varphi_{b,2}(q_b-d_b),$$

（二商品をA、Bとし、交換當事者を(1)、(2)とする。交換者(1)に對する商品Aの效用曲線の方程式を $r=\varphi_{a,1}(q)$, $r=\varphi_{b,1}(q)$ とし、交換者(2)に對する同樣なる方程式を $r=\varphi_{a,2}(q)$, $r=\varphi_{b,2}(q)$ とする。而して交換者(1)の所有するA商品の量を q_a とし、交換者(2)の所有するB商品の量を q_b とし、交換せられたる商品A、Bの量を d_a, d_b とすれば以上の方程式を得る。）

と同一であると論じて居る。(Ibid., pp. 169-70)

ジェヴンズとの關係も大體ゴッセンとの其れと同樣である。唯ワルラスはジェヴンズに就て次の如く述べて居る。「ジェヴンズは『任意二商品の交換比は交換後消費に供し得べき商品量の最終效用に反比例する』と言ひ、方程式

$$\frac{\varphi_1(a-x)}{\psi_1 y}=\frac{y}{x}=\frac{\varphi_2 x}{\psi_2(b-y)}$$

を以て之を表示して居るが、余の記號を以てするならば、

$$\frac{\varphi_{a,1}(q_a-d_a)}{\varphi_{b,1}(d_b)}=\frac{d_b}{d_a}=\frac{\varphi_{a,2}(d_a)}{\varphi_{b,2}(q_b-d_b)}$$

である。ジェヴンズの方程式は余の其れと二點に於て異る。即ち第一、彼は價格を交換比を以て代置して居ない。第二、彼は二人の交換者の場合を以て決定的のものと考へ……其の結果、彼の法則は假想的中正(fictitious means)に屬するものである。……余を以て見れば、ジェヴンズの方程式は二個人の場合以外には全く無價値である。固より斯る場合に於ては余の方程式と同一である。然し乍ら、余の所信に從へば、是より進んで、數人が相互に數個の商品を交換する場合を論ずべきである。是れ、ジェヴンズが價格を以てせずして、交換量を未知數として考ふるの不幸なる思想に執着し、研究を進めなかつた所である」と(Ibid., pp. 170-71)。ジェヴンズは自ら認めて、「經濟理論の一般的原理並に方法に關しては、彼は余の知る限りに於ては、余の成就し得るよりもより一般的且徹底的に經濟理

論を説明した」(Op. cit., préface XXXV)と言つて居るが、ワルラスはゴッセンの未だ及ばざりし點まで論歩を進めたりと述べ、自己の發見の一部分は當然彼より優越せる事を自認するものである。(Études d'Économie sociale, p. 361)

彼の言ふところに從へば「ゴッセン並にジェヴンズは余に先だつて、(第一)效用の數學的表示を發見し、(第二)商品が二個人間に交換される場合に於ける最大效用の條件を方式に依つて示した。此の點異論の餘地無き所である。ジェヴンズは(第一)に於てゴッセンに一籌を輸するものと自認し、(第二)に於ては自己の貢献なりと主張した。詢にゴッセンは單純なる極大の條件を等式に據つて示したるに過ぎず、ジェヴンズこそ、需要供給の一致する所に顯るゝ相互最大滿足の條件を等式に依つて表示した最初の人である。然し乍ら、彼等は唯二個人が二商品を相互交換する場合のみを考へたのであつて、無數の交換者が存する場合に於ける二商品の一方を以て他方を計りたる市場價格の決定問題には共に未だ到達しなかつた。然るに余の Principe d'une théorie mathématique de l'échange(août, 1873)は二個の問題を解決する。即ち一は、上述の二商品の各〻の市場價格決定問題であり、他は、市場價格變動の法則である。斯くて最大滿足の狀態と相並んで、總ての交換者に對し一定交換比率即ち一定市價の狀態(l'unité de prix sur le marché（筆者識す、ジェヴンズの一物一價）が生ずる。惟ふに、交換理論は二商品の相互交換なる甚だしく制限されたる場合に於てさへも、此等二重の條件を以て創めて完全となるものであつて、自由競爭なる機構に從ふ交換は、共通且同一の比例に於て賣買授受さるゝの條件と相俟つて、交換者相互に最大滿足を得せしむる作用を爲すものである。余は價格確立並に變動の法則を携へて、玆に交換の數學的理論を確立した。斯くて、所謂需要供給の法則を確然たる方式を以て示すと共に、其の完全なる證明に到達したのである。

ゴッセン並にジェヴンズは常に一個人若しくは個人の一集團を想定するが、之は一般的なる場合に非ずして、特異的且例外的なる假定であると考へる。斯くの如くば、其の主題たる、孤島に在るロビンソンの場合となつて了ふ。余の討究するは自由競爭の行はれる社會狀態に於ける事象であつて、是が純理經濟理論を形成するのである。彼等の研究する特殊な場合は、余の檢討する一般的な場合に完全に包攝されるのである」と述べ、「斯く言へばとて、余は彼等を非謗せんとするものに非ず、常に滿腔の感謝を捧ぐるものである。彼等は總ての純理經濟學の出發點を奪つたが、巧妙にも、一切の有益なる推論を導くの余地を與へたるが故に」と言つて兩者に深甚の尊敬を拂つて居る。(Études, pp. 361-65)

以上、ワルラスが自ら負ふ所ありとなす先覺の所論と彼自らの理論構成との關係を明にした。然らば、ワルラスの價値論其のものは如何、之を俟つて一切の結論は與へらるゝ譯である。

六

彼は基本的なる一般的考察より出發する。社會的富を「ラール(rare)なるもの、換言すれば一方效用あると共に、他方使用し得る量に制限ある物質的非物質的なるものの總體」と定義し、「物が何等かの使用に供せられ、何等かの欲望に應じて滿足を與へる場合、此の物は效用がある(utile)と言ふ。必要有用快適贅澤、總て是等は吾人にとつては、唯效用の程度を示すに過ぎぬものである。又效用ある

事物の充足する欲望が道德的のものであるか不道德的のものであるかは、茲に於ては考慮に容れる必要はない。一つの物質が病氣を治す爲に醫者によつて求められるか、或は殺人者によつて彼の家族を毒殺する爲に求められるかは、他の見地よりしては極めて重要なる問題であるが、此の場合に於ては全然無關係である」と。(Éléments., p. 21)次に、rare及び rareté なる語の意義如何と言ふに、此は力學に於ける速度、物理學に於ける熱と同樣、科學的意義を有するものであつて、經濟學上に於ては、稀少と夥多とは相互對立するものではなく、效用あり量に制限ある以上は、如何に豐潤であつても rare であると言はねばならない。」而して彼に從へば「效用あり、稀少なるの事實は次の三個の結論を生ずる。

（一）效用あり、稀少なるものは占有される。

（二）效用あり、稀少なるものは價格を有し交換される。

ラールなるもの一度占有されると其等のものの間に比率が生じ、其のものに固有なる直接效用とは獨立に、一定比率に於て他物と交換され得る能力を獲得する。斯くの如くして交換價値なる事象が生ずるのである。

（三）效用あり、稀少なるものは產業により生產され增加される。

斯くて一度交換價値が確立されると、此の事實は、其の本源に於ても表現に於ても存在態樣に於ても、自然的事象たるの特質を有する事となる。若し小麥及び銀が價値（la valeur）を有する場合には、其はラールなりと言ふ自然的事情に基くのであり、某々の價値(telle valeur)を有する場合には、其はラルテの相對的程度によるのであつて、共に均しく自然的事情に基くのである。

爾斯くの如くして愈〻交換理論の說明に這入るのであるが、彼は最も單純なる場合として二商品交換の問題を論じ、(Éléments., Sec. II) 進んで最も重要なる一般的平衡論(Ibid., Sec. III)を述べて居る。彼に從へば、二商品間の平衡價格論を一般化する事によつて、一般的平衡價格論に到達すると言ふのであるが、價格原因としてのラルテが兩論に於て占むる地位は、著しき相違を示して居る。這般の消息は以下兩論の說明を俟つて明らかになるであらう。

彼の交換論は性質論と原因論との二つに區分する事が出來る。而して彼に從へば「交換價値の事實の如き一般的事象の秩序的研究に於ては、其の性質の檢討は其の原因の研究よりも先に爲さるべきものである」と(Ibid., p. 44)。

〔第一〕交換價値性質論

性質論に於て彼の說かんとするところは、需要の等式(幾何學的に言へば曲線—以下之を略す)と供給の等式とに依る平衡價格決定の問題である。

前述の如く、交換價値とは「無償にては獲得讓渡せらるゝ事なく、他物に對して或る比率量を以て賣買授受せらるゝの性質であつて、斯くの如く、數量的性質を有するが故に、人間の個人的意思活動によつて勝手に左右せらるゝ事なく、自由競爭のもとに於て完全に顯るゝ自然的現象である。かくて彼は需要供給を以て價格の函數であると看て居るが、此の點クールノーの暗示を受けたるものである事はザワヅキーの指摘する通りである。(Les mathématiques appliquées à l'économie politique,

p. 114)然りと雖も、該理論を全體として發展せしめたのは其獨創である。即ち價格は需要供給をして一致せしむるが如き點たらざる可らずとの命題を發展擴充して、結局經濟的平衡の全理論に到達したのである。然らば平衡價格は如何にして成立するか。

二人各異る二商品を有し、各價格に於て一定量を供給し、相手より之に相當する量を得る場合、其の交換價値の決定を檢せんに、若し需要と價値との間の函數關係 Fa (Pa), Fb (Pb), を知る事が出來るならば、此の問題は未知數と同數にして且二商品の需要供給の關係を示すところの方程式に依つて、解析的に完全に解く事が出來る。即ち他物を以て計りたる一物の價格（bを以て計りたるaの價格）は交換されたる數量の反比に等しい。

$$Pa,b=\frac{qb}{qa},\quad Pb,a=\frac{qa}{qb},$$

$$(1)\cdots\cdots Pa,b\times Pb,a=1$$

然るに平衡價格に於ては、A商品の有效需要は其の有效供給に等しく、從つてB商品の需要とAを以て計りたるBの價格との相乘積に等いから

$$(2)\cdots\cdots Fa(Pa)=Fb(Pb).Pb$$

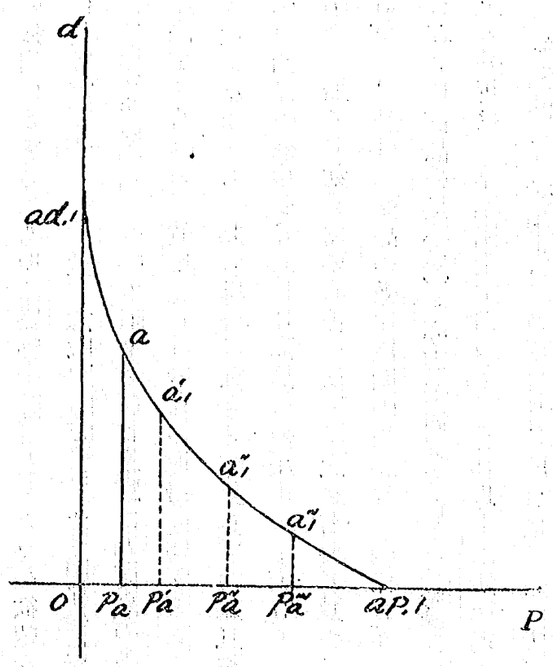
となる。故に代數的に觀れば、以上二式の根を求むる事に依つて平衡價格を決定する事が出來るのである。故に曰く「二商品が與へられたる場合、市場の平衡を得る爲には、此等商品の各〻の有效需要が其の有效供給に等しかるべく、又等しきを以て充分である。此の平衡が得られない場合には、平衡價格に到達する爲に、其の有效需要が有效供給を超ゆる商品の價格は騰貴し、此と反對の場合には、下落する事が必要となる」と(Ibid., p. 64)。

然らば斯くの如き需要の等式函數の形式は何を原因として、如何なる尺度に據つて決定されるのであるか。是が即ち彼の交換價値原因論である。

〔第二〕　交換價値原因論

ワルラスに從へば、價格と直接の關係に立つものは需要であり、事實上、價格は需要曲線より數學的に生ずるものであるから、需要曲線の確立並に變動の主要なる原因及び條件は、又等しく價格の主要なる原因及び條件である。(Ibid., p. 72) 故に彼は次のグラフを用ゐて此の曲線を說明する。

第一圖



（第一圖）—B商品の所有者(1)のA商品に對する需要曲線を示す。

(α) $Oad_{.1}$ の長さは所有者(1)の價格零なる場合に於けるA商品の需要量を示す。此の量は一般にA商品の效用量 (utilité d'extension, ou extensive) に依つて決定される。效用量とは、財

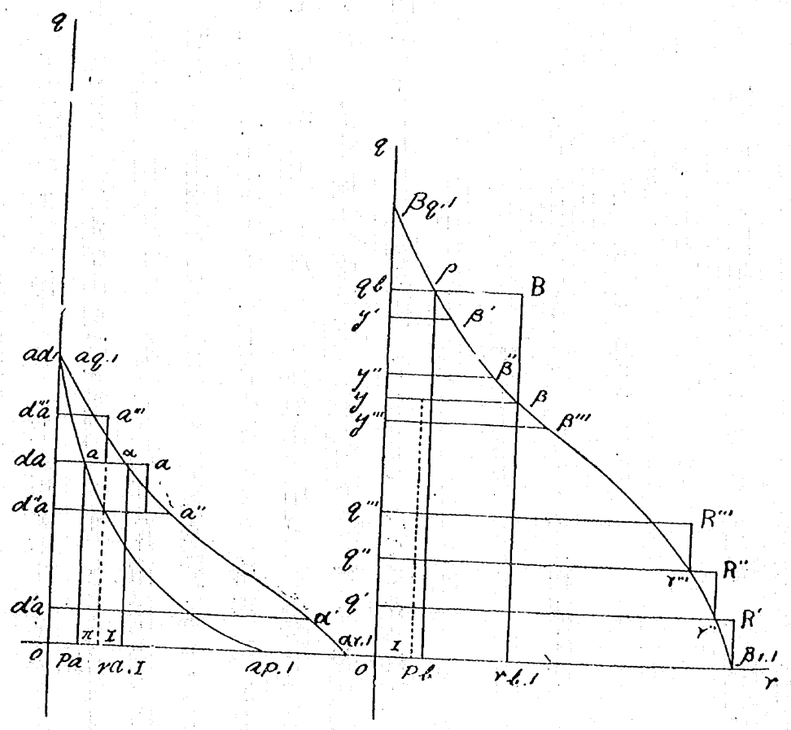
貨の獲得に要するあらゆる犧牲を除外して人々の欲望を充足する效用、換言すれば價格零なる場合に於て需要せらるゝ量を意味する。故に需要曲線の出發點は是によつて決定せらるゝのである。

(β) 次に需要曲線(ad_1, ap_1)の低下及び到達點はA商品の效用度(utilité d'intensité, ou intensive)に依つて決定せられる。效用度とは財貨の獲得に要するあらゆる犧牲を考慮に入れて商品の消費せらるゝ量を意味する。此の場合は前者と相異して複雜且相對的である。蓋しA商品の需要曲線の低下はA商品の效用度と共にB商品の效用度にも依存するからである。B商品の其れの場合も同樣である。斯くの如く需要曲線の低下は之を需要の減少と價格增加との比率の限界と定義し得るのであつて、是は二商品の效用度間の複雜なる關係を顯示するのである。更に現在、所有者(1)の手中に在るB商品の量(qb)も亦需要曲線の低下に影響を及すのである。

以上の分析は一見不完全であつて、是れ以上論歩を進むる事は不可能の如くに考へられる。何故ならば、絶對的なる效用度は、效用量及び所有量と異つて、直接測定し得る時間とも空間とも無關係なるが故に、吾人は之を知る術もないからである。然し乍ら、此の困難は克服し得られる。即ち吾人は效用量、效用度、所有量の價格に及す影響を數學的に計量し得るからである。故に先づ效用度を衡る原基の存在する事及び效用度、效用量は一定時間中、交換者に對し固定的なるものと想定する。即ち(第二圖)に於て

縱線 Oq は商品量、横線 Or は效用度を示す。Oq, q_1q_2, q_2q_3, q_3q_4,…… は所有者(1)が一定時間中に於て繼續的に消費するB商品の各單位を示す。此の場合に於て、各單位の效用度は最緊要なる欲望より飽滿に至る迄次第に減少する。

第二圖



故に衣服の如く一單位づつ消費する商品に於ては、非連續曲線($\beta r_1 R' r'' R''' r''' R'''$……)となり、食物の如く微小量づゝ消費する商品に於ては、連續曲線($\beta r_1 r'' r'''$……)となる。圖により $O\beta q_1$ 及び Oaq_1 は商品B及びAの效用量、$O\beta q_1$, βr_1 及び $Oaq_1 ar_1$ は商品B及びAの總效用(utilités virtuelles)である。從つて $ar_1 aq_1$ 及び $\beta r_1 \beta q_1$ は商品A及びBの效用曲線(欲望曲線)を示すのであつて、是等は更に二つの性質を具有する。

(α) 有效效用(utilité effective)―一定量の商品を消費する事によつ充足せられる欲望の總和。故に

曲線 $\beta r_{.1}$ $\beta q_{.1}$ は一個人に依つて消費せられるB商品の量を函數とする有效效用であり、OqbP$\beta r_{.1}$ は qb 量の消費によつて得られる有效效用を示すのである。

(β) ラルテ (rareté)—一定量の商品を消費する事によつて充足せられたる最終滿足の强度。故に曲線 $\beta r_{.1}$ $\beta q_{.1}$ は同一個人に依つて消費せられたるB商品の量を函數とするラルテ曲線であり、從つて qbP 即ち OPb は qb 量の消費によつて得られたるラルテを示すのである。斯くて吾人は次の命題に到達する。—「ラルテは所有量の減少と共に增加し、反對の場合には減少する」と。

以上を解析的に考察せんに、有效效用は消費量を函數とするから、方程式 $U=\phi_{a.1}(q)$, $U=\phi_{b.1}(q)$, ラルテは其の誘導函數であるから $r=\phi'_{a.1}(q)$, $r=\phi'_{b.1}(q)$ を以て示し、同時に又ラルテは消費量を函數とするから $r=\varphi_{a.1}(q)$, $r=\varphi_{b.1}(q)$, を以て表される。然らば有效效用はOより q迄の定積分

$$\int_0^q \varphi_{a.1}(q)dq, \quad \int_0^q \varphi_{b.1}(q)dq,$$

によつて與へられる。故に有效效用とラルテとの相關關係を示さんに

$$u=\phi_{.1}(q)=\int_0^q \varphi_{.1}(q)dq,$$

$$r=\phi'(q)=\varphi(q),$$

となる。

續いて一個人がある價格に於て、一商品と他商品とを交換する場合を考察するに、彼にとつて最大滿足(最大有效效用)の獲得せらるゝは、$r_{a.1}$ と $r_{b.1}$ との比が交換後 Pa(Bを以て計つたAの價格)に等しくなつた時である。最大滿足の原理(Condition de la satisfaction maximum)と言ふは即ち是であつて、ジェヴンズの交換第一原理と全く同一である。彼の證明を略記すれば次の如くである。今一個人がB商品の qb 量を所有する場合、彼の總效用は OqbP$\beta r_{.1}$ の表面積である。然し乍ら彼は斯くの如く全部を消費しないであらう。何となれば、B商品の一部分だけを消費し、殘りは之を以て、市場價格に於てA商品と交換する方がより多くの欲望を充足し得るからである。之を圖によつて示さんに、Bを以て計りたるAの價格 Pa なる場合、Oy を以て表すB商品の y量だけ消費し、殘りの yqb をA商品の da 量(Oda を以て示す)と交換するならば、前よりも總量に於て大なる $Oy\beta\beta r_{.1}$ + $Oda\alpha\alpha r_{.1}$ の表面積を以て表される欲望の總量を充足し得る事となる。然るに彼は可及的大なる滿足を得んとして交換を行ふが故に、價格 Pa が與へられて居る場合には da は $Oy\beta\beta r_{.1}$ + $Oda\alpha\alpha r_{.1}$ の表面積を最大ならしめる條件に依つて決定せられる。此の條件こそは、交換後に於て

$$Pa=\frac{ra_{.1}}{rb_{.1}}$$

となる事によつて充されるから、$ra_{.1}$ と $rb_{.1}$ との比が Pa に等しくなつた場合に始めて最大滿足が得られる事となるのである。斯くて此の最大滿足の原理より需要曲線、供給曲線が決定せられ、斯くして數學的に平衡價格の確立を看ると言ふのである。

以上の說明を經てワルラスは遂に最後の結論に到達する。「交換價値の原因は何であるか」。今商品A及びBの交換價値を Va, Vb とし、$ra_{.1}$, $rb_{.1}$, $ra_{.2}$, $rb_{.2}$, $ra_{.3}$, $rb_{.3}$……を交換後の各交換者(1)(2)(3)……に對する各商品のラルテとすれば、最大滿足は上述の說明に由つて交換者(1)にとつては

$$\frac{ra_{.1}}{rb_{.1}} = Pa, \quad \frac{rb_{.1}}{ra_{.1}} = Pb;$$

交換者(2)にとつては

$$\frac{ra_{.2}}{rb_{.2}} = Pa, \quad \frac{rb_{.2}}{ra_{.2}} = Pb;$$

交換者(3)にとつては

$$\frac{ra_{.3}}{rb_{.3}} = Pa, \quad \frac{rb_{.3}}{ra_{.3}} = Pb;$$

$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

故に

$$Pa = \frac{ra_{.1}}{rb_{.1}} = \frac{ra_{.2}}{rb_{.2}} = \frac{ra_{.3}}{rb_{.3}} = \cdots\cdots\cdots\cdots$$

$$Pb = \frac{rb_{.1}}{ra_{.1}} = \frac{rb_{.2}}{ra_{.2}} = \frac{rb_{.3}}{ra_{.3}} = \cdots\cdots\cdots\cdots$$

即ち

$$Va : Vb$$
$$:: ra_{.1} : rb_{.1}$$
$$:: ra_{.2} : rb_{.2}$$
$$:: ra_{.3} : rb_{.3}$$
$$\cdots\cdots\cdots\cdots$$

となる。故に一般的に「平衡價格はラルテの比に等し、或は交換價値はラルテに比例する」との結論を得る。(Éléments, p. 101) 彼に從へば、「斯くの如くラルテと交換價値とは隨伴的比例的二現象なる事確實なるが故に、正確にラルテは交換價値の原因である。何となればラルテは個人的主觀的であつて、且絶對的のものであり、交換價値は現實的客觀的であつて、且相對的のものなるが故である。例へて見ればラルテは物體であり、交換價値は重量の如きものである」と (Ibid., pp. 102-3)。

以上の所論はジェヴンズの説明と甚しく接近して居る。ワルラスも自ら認めて、「ジェヴンズと余との勞作は相互確認し、完璧にして、價値あらしめるものである」と(Éléments, préface VII)。詢に彼等の限界效用説は人間心理の解剖より出發して、最大滿足の原理(Walras—Condition de la satisfaction maximum, Jevons—The condition of exchange)を確立し、是に依つて交換の平衡點の決定即ち交換價値の成立を説明し、其の原因を限界效用に在りと認める。

然らば原因論としての彼等の限界效用説には如何なる批評が與へらるゝであらうか。私はジェヴンズの其れに就ては姑く之を措き、專らワルラスの價値論に就き檢覈を試みんとするものである。

卑見を以てすれば、ワルラスの交換價値原因論は其の論理的過程に於て循環論に陷つて居るものと信ずる。何となれば、價格の原因を説明せんとする彼の價値論が常に價格を豫想するからである。固より所與とする價格と平衡價格とが必ず相異し得る場合には、嚴密なる意味に於て循環論とは言ひ得ないであらう。然し乍らワルラスに於けるが如く、價格なる概念は總て同一方法に依つて説明

し得る一つの平衡點である以上、價格は價格其のものを左右する諸現象を決定し得る事となるが故に、當然循環論に陷つて居るものと言ふべきである。ザワヅキーも亦ワルラスの以上の原因論を評して次の如く言つて居る。「此の結論たる、到底正確とは言へない。此の二現象は共通の原因を有するかも知れないが、一般に價格の原因を解決するものとは言ひ得ない。何となれば、交換比率は交換比率に影響を及ぼす諸現象を決定し得るからである」と（Op. cit., p. 119）。此の點に就て同じ限界效用論者ベーム・バヴェルクがジェヴンズ及びワルラスの限界效用說を評して次の如く述べて居るのは、甚だしく吾人の興味を惹くのである。「世人も知る如く、ジェヴンズ及びワルラスも亦吾が學派と相似の價格法則に到達した。然し乍ら彼等の叙述は猶ほ著しき欠陷を示すものであつて、我が墺太利學派こそ創めて之を滿たしたと言つて宜い。特に我々は需要供給の舊價格理論の總てが陷つた循環論（circulus vitiosus）から眞先きに正しき道路を見出した。即ち一方市場に於ける呼値は、其の商品に就て爲す評價（Wertschätzungen）に依つて影響されると同時に、他方多くの場合に於て、評價は又其の商品の市場價格の狀態を通して影響を受ける。—例へば余に對して冬服の限界效用は、其の市價が二十弗の場合よりも十弗の場合に於て遙かに低い事は明白である。故に需要供給法則の正確なる心理的說明を一般に必要なりと考へたジェヴンズ、ワルラスの說明は循環論の迷路に墮して居る。即ち彼等は說明の明瞭不明瞭に於て程度の差はあるが、均しく價格を個人の評價から說明し、個人の評價を再び價格から說明する。固より是は何等の解決でもない。然も經濟學は斯くの如き未解答の解答に滿足するより他なかつた。然し乍ら、墺太利學派は精密なる研究によつて事象の根柢まで究めんとするの努力を最初に試みたのである」と。（Gesammelte Schriften SS. 211-2）眞實、墺太利學派は正當なる論理的過程に於て交換價値の唯一根本原因を尋ね得たであらうか。彼の價値論は正常價格の說明に於て全然價格概念の想定を離れて成立し得るものであらうか。此の點聊か最後の結論に於て觸るゝところである。

七

ワルラスは二商品間に於ける交換理論を以上の如く論じ、進んで數個商品間に於ける交換理論即ち一般的平衡論を說明する。該論こそはローザンヌ學派成立の因由であるから、煩雜を顧みずして數學的說明を辿らうと思ふのである。彼に從へば、一般的平衡は未知數と同數の方程式を得る事に依つて解決し得られるのである。此の方程式は幸にも需要供給價格の一般的關係を考察する事に由つて確立する事が出來る。

先づＡＢＣＤ……Ｍ個商品の場合に於て、Ａ商品を以て計りたるＢＣＤ……商品の有效需要の方程式は

Db.a = Fb.a (Pb.a, Pc.a, Pd.a……)

Dc.a = Fc.a (Pb.a, Pc.a, Pd.a……)

Dd.a = Fd.a (Pb.a, Pc.a, Pd.a……)

……

（說明—各〻の需要は、交換せられたる商品の、他物を以て計つた價格の函數であるのみならず、

同様にして計られる各價格の函數でもある。）

となり、是に依つて(m−1)個の方程式を得る。同様にしてB商品を以て計りたるACD……商品の有效需要の方程式は

$$Da.b = Fa.b\ (Pa.b,\ Pc.b,\ Pd.b \cdots\cdots)$$
$$Dc.b = Fc.b\ (Pa.b,\ Pc.b,\ Pd.b \cdots\cdots)$$
$$Dd.b = Fd.b\ (Pa.b,\ Pc.b,\ Pd.b \cdots\cdots)$$
$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

となり、等しく(m−1)個の方程式を得る。以下同様にして總計m(m−1)個の方程式が與へらるゝ事となるのである。又需要と供給とは相等しく價格は反比例なるを以て、A商品とBCD……商品との交換方程式は

$$Da.b = Db.a,\ Pb.a,$$
$$Da.c = Dc.a,\ Pc.a,$$
$$Da.d = Dd.a,\ Pd.a,$$
$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

となり、其の數(m−1)、同様にしてB商品とACD……商品との交換方程式は

$$Db.a = Da.b,\ Pa.b$$
$$Db.c = Dc.b,\ Pc.b$$
$$Db.d = Dd.b,\ Pd.b$$
$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

となり、等しく(m−1)個、以下同様にして、總計m(m−1)個の方程式を得るから、前者と併せて2m(m−1)個の方程式が與へらるゝ事となる。然るに未知數はM個商品相互間になりたつ價格m(m−1)と相互交換量m(m−1)併せて2m(m−1)個となるから、未知數と同數の方程式に由り、數學的に一切は解決せらるゝ譯である。

以上は各商品の各價格に於ける獨立的相互平衡狀態であるが、市場の一般的平衡は相互二商品間の價格が、第三の商品を以て計つた其の二商品の各價格の比に等しい場合に生ずるのである。即ち、方程式を以て示せば次の如くである。

$$Pc.b = \alpha \frac{Pc.a}{Pb.a} \quad (\alpha > 1)$$

$$\frac{Pc.b\ Pb.a\ Pa.c}{\alpha} = 1$$

蓋し然らざる場合に於ては、直接交換よりも間接交換即ちarbitrageによるを以て利益とするからである。故に間接交換の起らざる一般的平衡に於ては、價格の相互に相等しい關係即ち(m−1)(m−1)の方程式が立てられねばならない。即ち

$$Pa.b = \frac{1}{Pb.a},\ Pc.b = \frac{Pc.a}{Pb.a},\ Pd.b = \frac{Pd.a}{Pb.a},\ \cdots\cdots\cdots$$

$$Pa.c = \frac{1}{Pc.a},\ Pb.c = \frac{Pb.a}{Pc.a},\ Pd.c = \frac{Pd.a}{Pc.a},\ \cdots\cdots\cdots$$

$$Pa.d = \frac{1}{Pd.a},\ Pb.d = \frac{Pb.a}{Pd.a},\ Pc.d = \frac{Pc.a}{Pd.a},\ \cdots\cdots$$

$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

然るに斯る市場に於ては、各商品の需要供給相等しきを以て、

$$Da.b + Da.c + Da.d + \cdots\cdots = Db.aPb.a + Dc.aPc.a + Dd.aPd.a + \cdots\cdots$$

$$Db.a + Db.c + Db.d + \cdots\cdots = Da.bPa.b + Dc.bPc.b + Dd.bPd.b + \cdots\cdots$$

$$Dc.a + Dc.b + Dc.d + \cdots\cdots = Da.cPa.c + Db.cPb.c + Dd.cPd.c + \cdots\cdots$$

$$Dd.a + Dd.b + Dd.c + \cdots\cdots = Da.dPa.d + Db.dPb.d + Dc.dPc.d + \cdots\cdots$$

$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

なるm個の方程式を得るが、此は消去法により事實上(m−1)個となる。故に直前の平衡狀態に於ける方程式(m−1)(m−1)並に需要の方程式m(m−1)とを併せて合計2m(m−1)個の方程式を得る事となり、未知數と同數の方程式に由り全體的解決が與へらるゝのである。

以上は交換者が一個商品のみを有する場合であるが、進んで各〻數個商品を有する場合に於ける一般的平衡價格は如何にして決定せらるゝか。交換者(1)は商品Aを $qa_{.1}$、Bを $qb_{.1}$、Cを $qc_{.1}$、Dを $qd_{.1}$……量だけ所有し、商品ABCD……の一定時間中に於ける效用の方程式を $r = \varphi a_{.1}(q)$, $r = \varphi b_{.1}(q)$, $r = \varphi c_{.1}(q)$, $r = \varphi d_{.1}(q)$……とし、夫々Aを以て計りたるBCD……の價格を Pb, Pc, Pd……とし、交換者が相互交換するABCD……の數量を x, y, z, w……とすれば、一商品を需要する爲には是と同一條件の他商品を供給しなければならないから、x_1, y_1, z_1, w_1……は正負半ばする事となり、次の方程式が成り立つのである。

$$x_1 + y_1Pb + z_1Pc + w_1Pd + \cdots\cdots = 0$$

且最大滿足の原理に依り

$$\varphi b_{.1}(qb_{.1} + y_1) = Pb\varphi a_{.1}(qa_{.1} + x_1),$$

$$\varphi c_{.1}(qc_{.1} + z_1) = Pc\varphi a_{.1}(qa_{.1} + x_1),$$

$$\varphi d_{.1}(qd_{.1} + w_1) = Pd\varphi a_{.1}(qa_{.1} + x_1),$$

$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

なる(m−1)個の方程式を得る。直前の一方程式と併せてm個の方程式を得、從つて未知數 x_1, y_1, z_1, w_1……なる(m−1)の未知數を漸次消去し、斯くて價格を函數とする第m番目の方程式が與へられるのである。即ち交換者(1)に於けるBCD……の需要供給の方程式は次の如くなるのである。

$$y_1 = fb_{.1}(Pb, Pc, Pd\cdots\cdots)$$

$$z_1 = fc_{.1}(Pb, Pc, Pd\cdots\cdots)$$

$$w_1 = fd_{.1}(Pb, Pc, Pd\cdots\cdots)$$

$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

交換者(2)(3)……に就ても同樣である。

今交換者(1)(2)(3)……が交換する商品ABCD……の數量の總和を

$$x_1 + x_2 + x_3 + \cdots\cdots = X$$
$$y_1 + y_2 + y_3 + \cdots\cdots = Y$$
$$z_1 + z_2 + z_3 + \cdots\cdots = Z$$
$$w_1 + w_2 + w_3 + \cdots\cdots = W$$
$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

とし

$$fb_{.1} + fb_{.2} + fb_{.3} + \cdots\cdots = Fb$$
$$fc_{.1} + fc_{.2} + fc_{.3} + \cdots\cdots = Fc$$
$$fd_{.1} + fd_{.2} + fd_{.3} + \cdots\cdots = Fd$$
$$\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots$$

とすれば、總需要と總供給とは相等しく、兩者の和は零なるを以て

$$X=O,\ Y=O,\ Z=O,\ W=O\cdots\cdots$$

從つて平衡價格の見地より觀れば、

$$Y = Fb(Pb, Pc, Pd\cdots\cdots) = O$$
$$Z = Fc(Pb, Pc, Pd\cdots\cdots) = O$$
$$W = Fd(Pb, Pc, Pd\cdots\cdots) = O$$

となり、斯くて彼は通貨として定められたる第m番目の商品を以て計つた(m－1)商品の(m－1)個價格は、次の三個の條件に由つて數學的に決定されると言ふのである。即ち

（第一）　各交換者はラルテの比が價格に等しき場合に欲望の最大滿足を得る。

（第二）　各交換者の授受する比率は同一である。市場には總有效需要と總有效效用との相等しい一價格のみしかあり得ないから。

（第三）　二商品の平衡價格が第三の商品を以て計りたる各〻の平衡價格の比に等しき場合には、自由裁量(arbitrage)は起り得ない。

斯くの如くして、自由競爭の機構に據り、市場に於て實際的に以上の條件が充される事を證明するのである。

以上は一般的平衡論の大要であるが、進んで、彼はラルテとの關係を述べて、二商品交換の場合と等しく比例的なる事實を例證する。斯くて前論と同樣、「ラルテは主觀的絕對的事實なるが故に、交換價値の原因である」(Ibid., p. 140)と述べて居るが、是は決して唯一原因であり、且尺度たるの意味ではなく、單に價格發生に必要なる條件と言ふに過ぎない。即ち脚註に言ふ「相對的客觀的事實たる交換價値と絕對的主觀的事實たるラルテとの區別は、交換價値と使用價値との區別の嚴正なる表現である」と(Ibid., p. 140, Note)。一般的平衡論に於てラルテの占むる地位は、單に是が變ずれば平衡は破れ、直ちに又新なる他の平衡價格が確立すると言ふ所謂平衡價格變動の法則を成立せしめる一條件に過ぎないのである。然も此の變動の法則たる、又頗る重要であつて、確立の法則と合して、經濟學上、需要供給の法則と稱せらるゝ法則の科學的方式に到達するのである。此の法則の說明は

不幸にして今日迄誤解され或は不徹底極まるものであつたと述べて居る(Ibid., p. 143)。

八

以上を以てワルラスの價値論並に平衡價格論の大要とする。上述の如く、彼は個人經濟の場合より出發し、最も複雜なる一般的平衡論に至る迄論歩を進めるのであるが、其の間價格原因論としての價値論は到底一貫されたとは言へない。個人經濟に於ける交換價値の原因且尺度としての限界效用說は、前述の通り二商品交換價値原因論に於て之を縷述したが、斯くの如く心理的過程に關係し或は感情又は意思の强さに關係する效用概念を交換價値論に導入したる所以は、恐らく次の五個の理由に基くのであらうとザワヅキーは述べて居る。

一、交換價値の唯一原因として、

二、經濟現象を最後の諸要素にまで分析せる結果として、

三、單に需要供給の函數の形式として、

四、效用なる概念が交換に或る種の影響を及す場合には、需要供給の函數に關係せしめて說明すべきものとして、

五、交換の結果の實際的價値を判斷せしむる一要素として、

第一の理由は一般的平衡理論に於ては全く捨てられて居る。彼は言ふ—「交換の研究は、價格・有效需要・有效供給・數量・效用其の他諸力の關係の研究である」と(Élements, 1889, p. 20)。即ち彼の理論の根流は「價格は市場の平衡の確立が許すだけの高さであり、從つて其れは平衡の一切條件に據つて決定される」と要約されるであらう。(Zawadzky, Op. cit., pp. 131-9)

かるが故に私はワルラスの價値論を以て「二元的」であるとし、何等の終始一貫せる理論を與へず、二者其の去執を決し兼ねて居ると認むるものである。即ち彼の價値論には、二河の流れの合して猶ほ清濁明らかなる如く、心理主義に基く連續的因果說と函數關係に基く相互依存の理論との二つの色彩が認められる。個人經濟に於ては、其の交換價値の唯一原因且尺度としての限界效用說を提唱したが、複雜なる社會現象としての交換理論に於ては、價格の唯一原因を求むるの不可能を知り、經濟的諸因子の相互依據に依る一般的平衡價格の說明を以て終る。詢にモレエの所言の如く、彼の一般的平衡論は市場に於ける商品量と其れに對する價格との平衡が確立せられ得る如き諸條件の說明であり、且此等諸種の條件の存在すると言ふ事實は、平衡の種々なる要素間の連帶關係を示す事に由つて、價格の唯一原因を發見せんとする總ての試みの一切無效なる事を明示するのである。(Op. cit., p. 109)

九

然らばワルラスの限界效用說と一般的平衡論とは學問的價値に於て孰れが優つて居るか。

後期ローザンヌ學派に從へば、「輿論の趨勢は遂にワルラスを驅つて價値の唯一原因としての限界效用說を唱導せしめたが、彼自らは、事實上一定の場合に於ける平衡の諸條件を提示して、該原因論の誤謬を指摘するに與つて力があつた。詢に彼は撞着矛盾する二概念を表明する。即ち一方、經濟問題の總ての未知數は經濟的平衡の一切の方程式に依據すると敎へ、又他方、ラルテが交換價値の

原因なる事は明白であると斷定して居る。前者は眞に至言と言ふべきであるが、後者は事實に適合せざる陳腐なる所論の無意識的記憶に過ぎない」と(Pareto, Mannel d'Économie politique, p. 246)。又言ふ—「一般的平衡論は二重の意義に於てワルラスの純理經濟學中最主要部分を占むるものである。蓋し該論は他の一切諸論の根柢たると共に、相互依據の特徴を最も著しく表現して居るからである。是に由つてローザンヌの教授は、文學的經濟學者が單に因果關係のみを追及して居た分野に、新に影響を及すと言ふ榮譽を擔ふのである」と(Maret, op. cit., p. 109)。

私も亦ワルラスの限界效用說を目して循環論的誤謬なりと爲し、獨斷を下すに非んば之を貫徹するに由なき所以を立證した。パレエト等後期ローザンヌ學派が這般の消息を看取してか、心理的說明を全く放棄して、專ら經濟的平衡論に終始せんとするは蓋し自然の道程であらう。固よりワルラスが循環論的誤謬に陷つたのは、經驗論的說明の對象として、複雜なる社會現象を前提とし、從つて一種の價格を想定したが爲であつた。若しも交換價値と言ふが如き經濟現象の一要素を捉へ來つて、他條件より完全に遊離し、以て分析的且發生的に考察するならば、限界效用說は依然、個人經濟指導原理として頗る重要なる學說たるを失はぬ。マーシャルが短期に於ける價格の說明に於て限界效用說を重要視するは其の一證左であらう。此の點に於てワルラスも亦他の限界效用論者と共に一功績を殘したものである。若し夫れ、彼の一般的平衡論に至つては、ローザンヌ學派創設者としての榮譽を擔ふ所以のものであつて、經濟現象を綜合的に觀察せんとする以上、平衡論的價値論以上に突入するは無用の業たるに過ぎないのである。カッセルは一九〇三年の著 "The Nature and Necessity of Interest" に於て「幸にして價値理論全體の放棄は充分可能である。實際吾々が經濟學の研究を特別の價値論を以て始めなければならぬ理由は全くないのである。吾々は大なる利益を以て直に價格と之を支配する諸原因との說明を以て發足する事が出來る」(小泉教授「價値論の價値」前揭第三頁)と述べたが、事實ワルラスは價値論としてのラルラ論を必要とせずして完全なる平衡價格の確立並に變動の法則に到達して居る。

然らば結局價値論に與へらるべき結論は如何。ローザンヌ學派に從へば、交換價値と言ふが如き社會的一現象を說明する其の唯一理由として、交換價値の原因且尺度を發見するは頗る困難事に屬する。如何となれば、交換價値は事實上數多の條件に依據するものであり、其の唯一原因を求めようとすれば、必然個人的たらずんば假想的中正(fictitious means)となり、全くの抽象論に陷るの外なきが故である。ザワヅキーの言ふが如く、「交換價値の原因」なる概念が既に不正確である。經濟現象を綜合的社會的に看る以上、經濟的諸力間には相互依據、相互影響の事實がある。從つて交換價値の原因と目せられるものは、又其れ自體交換價値に據つて影響せられて居る。故に單純なる價格決定の方法以上に其の原因を探究するは、諸〻の要素の及す影響を無視し、且事實上相互依據の關係あるところに原因結果の關係を確立するの獨斷に陷つて居ると言つて宜いであらう(Op. cit., p. 257-8)。さればこそレオン・ワルラスが自己の限界效用說の全く獨立に構成せられたるにも不拘、誠實恬淡に其の競爭者ジェヴンズに優先權(priorité)を認め、專ら函數論的說明を以てする一般的平衡論を以て自己の貢献なりとするは眞に故なしとしないのである。ザワヅキーも言ふ—「惟ふに彼の一大貢献は

複雜且一般的なる場合に於ける經濟的平衡を論じ、以て數學應用に最も重要なる方向を指示せる點に存するものである」と(Ibid., p. 112)。

「天體運行學の進歩がニュートンの原則の重要性を減じないと同樣、經濟學が將來如何に發展するも、ワルラスの創見の重要性は毫も減少しないであらう」(Économie pure, 1902, p. 11)と言つたパレエトの稱讃は姑く措くとするも、マーシャルが「一度其の手を通つたものゝ精神に新しい躍動を與へねば已まぬ」(Principles of Economics, preface of 1st., ed. XI), クールノーに敎へらるゝ所多くして價値理論の論據を mutual causation に置き、偶〻ワルラスと同一結論に到達して居るのは、一般的平衡論の重要性を明示する一證左なりと信ずるものである。(了)

外國經濟史に關する新刊書（英書）

野村兼太郎

近來英米兩國に於いて經濟史に關する書籍の發兌さるゝもの甚だ多く、それ等のすべてを一々閲讀することは殆ど不可能事に屬すると云つてもよいくらゐである。昨年及び本年、即ち一九二六年から二七年にかけて公にされた經濟史に關係ある英文書籍中、余の寓目せるもののみを左に簡單に紹介しようと思ふ。中には精讀したものもあるが、單に通讀したに過ぎないものもある。又從つて同期間内に發刊された全部を網羅し盡したものでもない。殊に出來る限り簡單に要領を得しめやうとしたゝめに、甚だ不十分な紹介に終つてゐる點は許して貰ひたい。しかも敢てこれ等の新刊書を紹介する所以は一方現在の經濟史研究の傾向を窺ふことが出來、又他方この方面の研究に志す初心者に多少とも役立つことが出來るだらうと考へたからである。

J. B. Williams, A Guide to the Printed Materials for English Social and Economic History. 2 vols. pp. 535. pp. 653. Columbia University Press, 1926.

本書は J. T. Shotwell 編纂の Records of Civilization の一部をなすものであるが、一七五〇年から一八五〇年に至る百年間、即ち所謂産業革命時代の英國の經濟史及び社會史の資料を指示したも